

教科	社会科
6学年 单元名『当事者として政治を見つめる ～予算配分を通した価値の葛藤と調整～』	
日時	2026年 7 月3日
授業者	松林泰弘
本時のねらい	① 三原市議会議員や三原市こども部の方々との対話を通して、自分の予算案の不足点や、異なる立場の人への配慮の必要性に気づき、政治への当事者性を高める。 ② 予算配分という「正解のない問い」に向き合う中で、政治とは何かを自分なりの言葉でまとめられるようになる。
キーワード	予算配分 当事者性 価値の葛藤 調整 市議会議員 納得解
授業の実際 (本時の子供の姿)	第2次で、三原市議会議員や市役所職員の方々をゲストティーチャーとして招聘した。児童は、架空の市の担当者として、限られた500万円の予算を「高齢者の交通支援」や「防災対策」など、切実ながら対立する8つの要望にどう配分するかを検討した予算案を議員の方々にプレゼンした。その後、専門家ならではの鋭い問いかけ(揺さぶり)を受けた。この対話を通じて、子供は異なる考えを調整して「妥当解」や「納得解」を見つけていく政治の本質に触れることができた。振り返りでは、「答えのない問題をみんなで解決していくのが政治だと分かった」など、主権者としての自覚が見られる言葉が多く寄せられた。
事後協議の概要	参画した議員の方からは、「子供たちが公平性や将来性といった多角的な視点で予算を考えていることに驚かされた」との声があった。また、「全員を満足させる決定はない」という政治の厳しさを知りつつも、それでも「市民の声を聴き、最善を尽くす責任がある」と考えを深めた子供の姿に対し、本単元の「当事者性を引き出す」というねらいが十分に達成されたとの評価をいただいた。

